

ぼくのお兄ちゃん

佐久本 和夢

僕には五才年上のお兄ちゃんがいます。僕はお兄ちゃんの事が大好きです。お兄ちゃんは僕がお腹の中にいる時から毎日お母さんのお腹にむかって「僕がお兄ちゃんですよ。生まれてきたらいっぱい遊ぼうね。」と声をかけていたそうです。そして僕が生まれた時、分娩室の前の方で一番最初にだっこをするために手を出して待っていてくれたと聞きました。だから僕がこの世に生まれて一番にだいてくれたのはお兄ちゃんだったそうです。きつとその時からお兄ちゃんの事が大好きになったんだと思います。そして生まれてきたばかりの僕に「赤ちゃん、お兄ちゃんを守ってあげるからね。」と声をかけたそうです。その言葉通り僕がお兄ちゃんに守ってもらえたか？という小さい時はそうでもなかったかも知れませんが、仲が悪かったわけではないとお兄ちゃんの後を追ってまで遊んでもらうという事はありませんでした。五才の年の差は大きくてそれぞれ遊ぶことの方が多かったのも事実です。それでもお兄ちゃんと一緒にいられるのがとてもうれしかったです。

お兄ちゃんと僕が頑張っている事がありません。男子新体操です。その体操を頑張つて高校で日本一になりたいという目標を胸に去年の四月お兄ちゃんは青森へ行ってしまいました。お兄ちゃんが青森で生活を始めた事は僕にとっても大きな出来事でした。

高校の入学式の前の日、お兄ちゃんは寮に入りました。僕

はお兄ちゃんと、寮の前でバイバイをしました。先輩と一緒に歩いていくお兄ちゃんの背中を見て僕は悲しくてさみしくて涙が止まりませんでした。そして次の日入学式が終わりよいよ本当のお別れの時お兄ちゃんと僕とお母さんで交した約束・・・それは「笑顔でお別れをしよう。」だったのですが僕は涙をこらえてバイバイをしました。それなのに、お兄ちゃんは今にも泣きそうな顔をしていました。僕は泣く前にお別れをしないといけないと思いきいで「じゃあね」と言ってお兄ちゃんから離れてから泣きました。新幹線に乗っても涙は止まらず出発の音楽が鳴った時、いよいよお兄ちゃんから離れてしまおうと思うと声が出てしまっただけで泣いてしまいました。この時はやっぱりお兄ちゃんが大好きだ！ずっと一緒にいたかった！と心の底から思いました。

一緒に過ごしていたらきつと気付けなかったお兄ちゃんの大切さを僕は今本当に感じています。どんなに嫌な事やつらい事があってもお兄ちゃんも頑張っていると思うと僕も頑張れます。年に数回しか会えないけど僕の心の中にはいつもお兄ちゃんがいて勇気付けてくれたりはげましてくれたりしています。

お兄ちゃんは青森で練習や寮での生活、毎日が大変だけど頑張っています。そんなお兄ちゃんが僕の自慢です。お兄ちゃんが大好きです。いつも支えてくれてる事に感謝しています。これからもよろしくお願いします。